

## 編集後記

『国際交流基金日本語教育紀要』第14号には計14本の投稿があり、厳正な審査の結果、研究ノート1本、実践報告4本、報告4本の、計9本が採用されました。

今年度は、ここ数年と比較して投稿本数は少なめでしたが、残念ながら採用には至らなかったものも含め、世界の日本語教育の変化に対応する現場の「今」を伝える報告が集まりました。実践報告、報告では、ブラジルの「子ども Can-do」、中国の第二外国語教育支援、ベトナムの国定教科書開発、課題遂行に基づく学習デザイン、21世紀型能力の評価の取り組みなど、これまでの日本語教育の枠を超える現場の挑戦が報告されています。また、分析能力を養う文法授業、オンラインコースの運用、タイのNPに対する教務支援も日本語教育の新たな動きに対応した取り組みだと言えます。また、研究ノートは、コースデザイン論の再考から日本語教育の課題を提示した貴重な論考でした。これらの論考・報告により、今号が日本語教育のこれまでをふり返り、これからを考える機会になったと感じております。

さて、今回の編集委員会で取り上げられた話題の一つに、「実践報告」と「報告」をどう区別するか、という点がありました。「実践報告」はその名のとおりに、行った実践の目的、特徴、経過を詳細に記述すると共に、何らかの観点から実践をふり返り評価した結果を報告するものです。実践の詳細な記述に止まらず、評価を伴うことにより、次の実践や他の現場での応用可能性を示すことが不可欠となります。一方、「報告」は国際交流基金の事業や海外の日本語教育関係機関の実践・視察等の記録を残すことを目的としたカテゴリーで、現場固有性や速報性の高い情報をまとめるためのものです。「実践」の枠を超えて多様化する専門家の業務報告もこのカテゴリーに類するものと思われます。各カテゴリーには、そのカテゴリーに応じた評価基準が定められています。適切なカテゴリーであれば評価に値する論考・報告が、異なるカテゴリーで投稿されることで不採用となるのは残念なことです。ご投稿の際には、投稿規程および執筆要領を今一度ご確認くださいようお願いいたします。

世界の日本語教育現場で「今」しかできない実践、「今」しか得られない情報が日々積み重ねられています。そのような実践や情報をその現場だけに止めることなく、世界で共有していくために、本紀要をお役立ていただければ幸いです。次号はさらに多くのご投稿が寄せられることを期待しております。

菊岡由夏（『国際交流基金日本語教育紀要』編集委員長）